

第5次レッドデータブック：
絶滅のおそれのある日本の野生生物
The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan

オオソリハシシギ

Limosa lapponica baueri Naumann, 1836

守屋年史（バードリサーチ）

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 鳥類分科会



環境省 編

令和8（2026）年3月



特に文献内で別途指定がない限り、この文献はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

種毎の解説を引用する場合には以下のように記述してください。

引用表示：守屋年史，2026．オオソリハシシギ．環境省（編）第5次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物，pp. 459-464．

Citation: Moriya, T., 2026. *Limosa lapponica baueri* Naumann, 1836. In: Ministry of the Environment, Japan (ed.), *The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan*, pp. 459-464.

チドリ目 Charadriiformes シギ科 Scolopacidae

オオソリハシシギ

Limosa lapponica baueri Naumann, 1836

カテゴリー判定結果

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

A2

基準 A: VU

基準 B: —

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

A2. 過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

直近のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告(2020)では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 0.72（春期 0.59、秋期 0.85）。

【近年の状況】

直近のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告(2020)では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2017 年時点で、平均 0.55（春期 0.33、秋期 0.77）。継続して春期・秋期とも減少傾向が見られている。特に春期の減少が著しい。

評価分科会： 鳥類分科会

概要

長い脚と上に反った長い嘴の中型のシギ類。繁殖羽では、腹部は赤褐色、背面は黒褐色に白や赤褐色の斑がある。尾羽には黒い縞模様がある。非繁殖羽では、腹部は白色、背面が灰褐色になる。国内では、2 亜種が記録されている。極北部沿岸で繁殖し、国内では主に渡り鳥、沿岸部の干潟などの湿地に全国的に渡来する。干潟の減少などにより利用可能な生息地が減少している。また、中継地の環境悪化も懸念されている。個体数は近年春期に大幅に減少している。

基礎情報

【形態】

全長約 40 cm。長い脚と、上に反った長い嘴が特徴的な中型のシギ類。オスの繁殖羽では、頭部から腹部にかけて赤褐色。背は、黒褐色に白色、赤褐色の斑がある。尾羽は黒い縞模様がある。嘴は先端が黒く、基部はピンク色。脚は黒色。メスはオスに比べて赤色味が少なく、嘴はオスに比べて長い。非繁殖羽では、背面が灰褐色に白斑があり、腹部は白色。「ケツ ケツ ケツ」と鳴く。国内では、亜種オオソリハシシギ (*Limosa lapponica baueri*) のほか、きわめて少数が観察される亜種コシジロオオソリハシシギ (*Limosa lapponica menzbieri*) の 2 亜種が記録されている。コシジロオオソリハシシギは、翼下面、腰部がより白色。オグロシギ (*Limosa limosa*) は、嘴が真っ直ぐで、尾羽が黒い。

【生活史】

国内では繁殖せず、渡り鳥として春期、秋期に全国で観察される。渡りのルートの違いから春期の個体数は秋期に比べて多数観察される。繁殖地では、一夫一妻で繁殖を行う。オスはフライトディスプレイを行う。5 月下旬～7 月に産卵する。巣は低地のツンドラ地帯の乾燥した高い場所にあり、くぼみに植物の葉や地衣類を利用して作られる。一腹卵数は 2～5 個で、通常 4 個産卵する。雌雄が抱卵・育雛を同程度行う。嘴でつついたり、水中を探ったりするなどして貝類、環形動物、甲殻類、昆虫類、魚類、種子などを餌として利用する。非繁殖期には群れをつくり採食する。嘴の長いメスのほうが水深が深いところで採食する傾向がある。

【生息環境】

主に干潟や砂浜などの海岸や河川などの湿地に生息する。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】河口域，砂浜・礫浜，汽水域，塩沼地・塩性湿地・河口干潟，潟・汽水湖
	【海域（沿岸）_潮間帯 表層】干潟
国土地域区分：	(4) 河川・湿地地域，(5) 沿岸域

【分布域】

国外では、スカンジナビア、ロシア、アラスカの極北部沿岸で繁殖し、ヨーロッパ、アフリカ西岸、中央、東南アジア、オセアニア沿岸で越冬する。日本は主に渡り時期の中継地として利用され、北海道から南西諸島まで全国的に渡来する。亜種オオソリハシシギ (*Limosa lapponica baueri*) は春期にニュージーランド・オーストラリア南東部から、黄海付近を通過しアラスカで繁殖するが、秋期の渡りは春期と異なり主に太平洋を縦断するように南下する。そのため、日本では春期の個体数が多い。なお、亜種コシジロオオソリハシシギ (*Limosa lapponica menzbieri*) は、春期にオーストラリア北西部から黄海付近を通過しシベリア地域で繁殖し秋期に同ルートを通過し南下する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現況でも全国的に確認されるが、湿地、陸水域、海岸などの水辺に限られるため、水辺環境の消失は国内分布に影響を与えている可能性がある。

【生息地の現況】

干潟や湿地の減少により利用可能な生息地が減少している。1945 年以後の消失干潟の累計は 33,120 ha、1945 年から 2005 年の間の 60 年間の干潟の消滅率は 40%になる（花輪 2006）。

【個体数の現況】

現在、IUCN のレッドリストでは、オオソリハシシギ (*Limosa lapponica*) は準絶滅危惧とされているが、亜種オオソリハシシギ (*Limosa lapponica baueri*) と亜種コシジロオオソリハシシギ (*Limosa lapponica menzbieri*) は、絶滅危惧種の基準に適合するほど急速に減少している。

2008 年を基準としたモニタリング調査の結果を用いた研究では、オオソリハシシギの春期の推定変化率は、-39.63% (30 年前比)、-52.67% (20 年前比：有意)、-51.29% (10 年前比：有意)、秋期の推定変化率は、-78.49% (30 年前比：有意)、-62.38% (20 年前比：有意)、-63.54% (10 年前比：有意) (Amano et al. 2010) であり、春期・秋期とも著しい減少を示していた。

直近のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告 (2020) では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出し、2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 0.72 (春期 0.59、秋期 0.85)、2017 年時点で、平均 0.55 (春期 0.33、秋期 0.77) となり、継続して、春期・秋期とも減少傾向が見られた。特に春期の減少が著しい。

過去に大きく減少しており、個体数が回復しないまま、減少傾向が継続している。

存続を脅かす要因

干潟・湿地などの埋立や開発による生息環境の減少。長距離の渡りを行う種に関しては、国内のみに減少の要因を求めることが困難な場合もあり、繁殖地、中継地、越冬地それぞれに脅威がある。一例として、沿岸部の開発が著しい黄海を中継地として利用する種の減少傾向が指摘されている (Amano et al. 2010)。

要因の区分：	(過去)	海岸開発，湿地開発
	(現在)	海岸開発，湿地開発

特記事項

日本に渡来するガンカモ類やシギ・チドリ類などの渡り性水鳥類が利用する主要な渡来地については、河川湖沼 84 ケ所のうち 41.7%が保護区域未指定、干潟・湿地 152 ケ所のうち 66.7%が保護区域未指定であり、干潟・湿地を利用する鳥が多数訪れる場所について

は保護指定が遅れている現状が指摘されている（三上ら 2012）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オオソリハシシギ	<i>Limosa lapponica baueri</i>	VU
第4次 2019:	オオソリハシシギ	<i>Limosa lapponica baueri</i>	VU
第4次 2018:	オオソリハシシギ	<i>Limosa lapponica baueri</i>	VU
第4次 2017:	オオソリハシシギ	<i>Limosa lapponica baueri</i>	VU
第4次 2015:	オオソリハシシギ	<i>Limosa lapponica</i>	VU
第4次:	オオソリハシシギ	<i>Limosa lapponica</i>	VU
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和6年度末時点）

【北海道】情報不足(Dd), 【宮城県】準絶滅危惧(NT), 【山形県】準絶滅危惧(NT), 【福島県】情報不足(DD), 【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類, 【千葉県】要保護生物(C), 【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠB類(EN), 【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠB類(EN), 【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(非繁殖期), 【新潟県】準絶滅危惧(NT), 【富山県】情報不足(DD), 【福井県】県域準絶滅危惧, 【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【愛知県】絶滅危惧ⅠB類(EN)(通過), 【滋賀県】希少種, 【京都府】絶滅危惧種, 【大阪府】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【兵庫県】Bランク, 【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類, 【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【福岡県】絶滅危惧ⅠB類(EN), 【長崎県】絶滅危惧ⅠA類(CR), 【熊本県】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【宮崎県】準絶滅危惧(NT-r), 【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類, 【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和7年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Amano, T., T. Székely, K. Koyama, H. Amano and W. J. Sutherland, 2010. A framework for monitoring the status of populations: An example from wader populations in the East Asian-Australasian flyway. *Biological Conservation*, 143: 2238-2247.
- BirdLife International. 2017. *Limosa lapponica* (amended version of 2016 assessment). *The IUCN Red List of Threatened Species* 2017: e.T22693158A111221714. <https://dx.doi.org/10.2305/IUCN.UK.2017-1.RLTS.T22693158A111221714.en>. Accessed on 15 October 2025.

- 天野一葉, 2006. 干潟を利用する渡り鳥の現状. 地球環境, 11 (2): 215-226.
- Battley, P. F., N. Warnock, T. L. Tibbitts, R. E. Gill, T. Piersma, C. J. Hassell, D. C. Douglas, D. M. Mulcahy, B. D. Gartrell, R. Schuckard, D. S. Melville and A. C. Riegen, 2012. Contrasting extreme long-distance migration patterns in bar-tailed godwits *Limosa lapponica*. Journal of Avian Biology, 43: 21-32.
- 花輪伸一, 2006. 日本の干潟の現状と未来. 地球環境, 11 (2): 235-244.
- 環境省自然環境局生物多様性センター, 2020. 重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書. 環境省, 富士吉田市.
- McCaffery, B. J. and R. E. Gill, 2020. Bar-tailed Godwit (*Limosa lapponica*), version 1. 0. In Birds of the World (S. M. Billerman, Editor). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA.
- 三上かつら・高木憲太郎・神山和夫・守屋年史・植田睦之, 2012. 渡り性水鳥類の渡来地の保護区域指定の現状. 日本鳥学会誌, 61: 112-123.
- 日本鳥学会, 2024. 日本鳥類目録改訂第 8 版. 日本鳥学会, 東京. 506pp.
- Studds, C. E. *et al.*, Rapid population decline in migratory shorebirds relying on Yellow Sea tidal mudflats as stopover sites. *Nat. Commun.* 8, 14895 doi: 10.1038/ncomms14895 (2017)
- Wetlands International, 2023. “Waterbird Populations Portal” . Retrieved from wpp.wetlands.org on Mon Feb 2020 23.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Limosa lapponica baueri has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Limosa lapponica baueri* is listed as VU under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of $\geq 30\%$ over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】 Estuary, Sandy beach/Pebble beach, Brackish water, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland), Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】 Intertidal mudflat
Threat types:	Coastal development, Wetland development
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	守屋年史 (バードリサーチ)
Author:	Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月